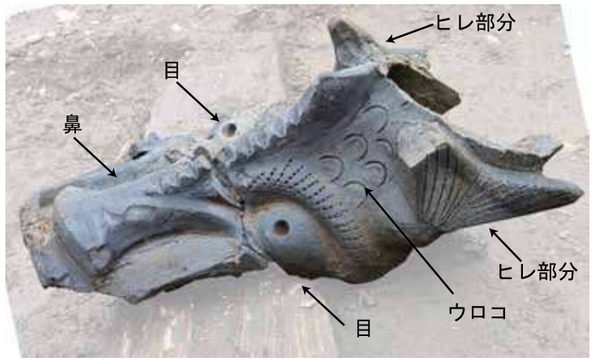
4　本丸北堀跡（北東隅部）出土の黒鯱瓦

本丸北堀跡（北東隅部）の堀底から、下写真の黒鯱瓦が出土しました。黒瓦とは釉(うわぐすり)を使わない燻（いぶし）瓦のことです。顔部分の破片ですが、最大長約50センチに及びます。意匠は目・鼻・歯牙・ヒレ・体のウロコが表現されています。

特徴としては、目の上左右にヒレが一対表現されています。これまで出土した鯱瓦はいずれもヒレは別作りで差し込む「組合せ式」です。一体造形は初めての型式です。

瓦の製造年代を示す証拠はありませんが、造形が一体となる簡略化の傾向を読み取れることと、焼成効率が良く、体色が銀鼠であることなどから江戸時代後半～幕末にかけてのものの可能性がありますが、出土地点は堀の二ノ丸側に近くどこで使われた鯱瓦かはわかりません。



黒鯱瓦の出土状況及び部位名称位置図

5　本丸北土塁跡地下の古代遺構・遺物

今次発掘調査では、古代（平安時代）を中心とした遺構・遺物も良好な状態で発見されました。

遺構は竪穴建物１棟と土坑２基を検出し、土師器坏・甕や須恵器坏蓋・壺・甕などが出土しています。土師器で内外面に黒色ミガキ処理を施した薄手の坏が１点出土しており、特異な用途に使用したものと考えられます。

これらの遺構・遺物が発見された場所は、鳥居氏時代の推定土塁の範囲にあたり、近世を通じて御殿などの建物の影響を受けにくかったことが良好に保存された理由です。なお、これらの遺構群の上位には旧市営球場建設に係るカクラン層が堆積しているため、山形城跡の土塁範囲を示す痕跡はすべて失われているものと考えられます。

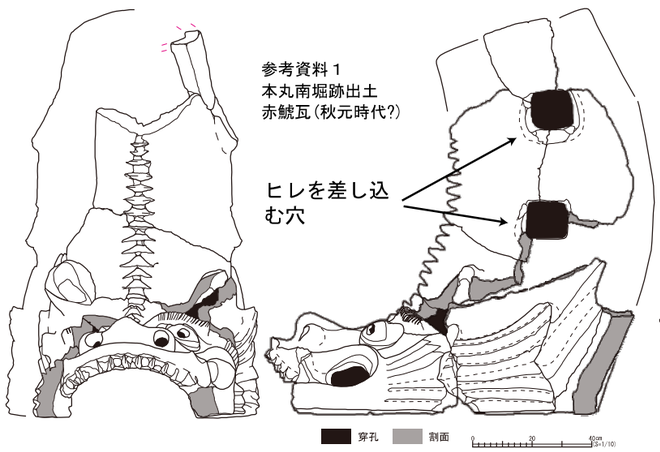
須恵器甕

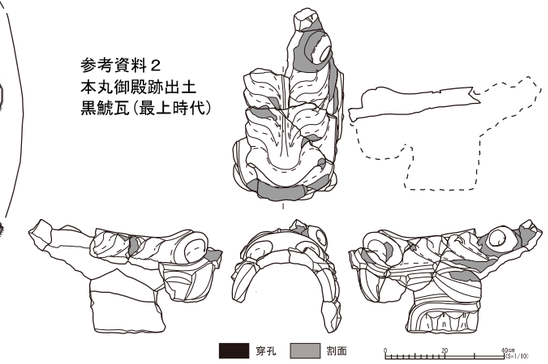
土師器甕

土師器甕

土師器坏（内外黒色ﾐｶﾞｷ）

須恵器壺





編集後記

現地説明会開催に当たり関係各位に多大なご理解・ご協力を賜りましたこと誠に感謝申し上げます。なお、山形城跡の復原整備事業に係り関連する資料を探しています。お心当たりの方は下記までご連絡下さいますようお願いします。

【お問い合わせ先】〒990-8540 山形県山形市旅篭町二丁目3番25号 山形市まちづくり政策部公園緑地課 ℡023(641)1212㈹
【編集・発行】山形市企画調整部　文化振興課　文化振興課

史跡山形城跡(2022)　本丸北堀土塁跡発掘調査　現地説明会資料

令和４年11月19日（土）　山形市　企画調整部　文化振興課

調査要項

遺　跡　名	国指定史跡　山形城跡
所　在　地	山形市霞城町（霞城公園）
遺跡番号	１番（山形県遺跡地図）
調査期間	令和4年5月11日～11月30日（予定）
調査面積	本丸北堀土塁跡（北東部）　約１，４００㎡
調査原因	史跡山形城跡（霞城公園）整備事業（文化庁補助事業）
遺跡種別	城郭（近世城郭）
時　代	近世・近現代
遺　構	堀跡・土橋跡・土橋石垣・護岸石垣　など
遺　物	瓦類・陶磁器碗皿類・土師質土器・木製品・金属製品・石製品・須恵器土師器　など
調査事業の主体	山形市まちづくり政策部公園緑地課
調査実施の機関	山形市
調査担当	山形市企画調整部　文化振興課

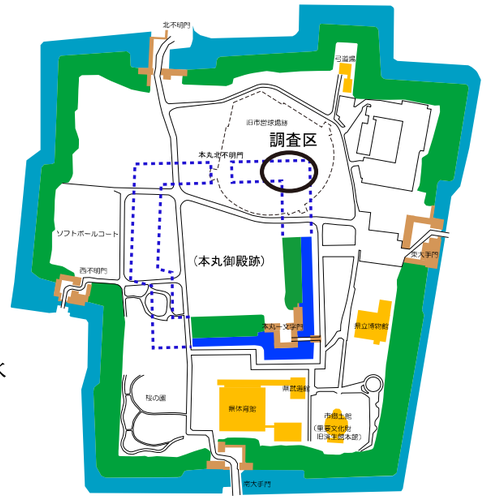
1　概要（史跡の立地及び周辺の環境）

山形城跡は，最上義光が整備したといわれる本丸・二ノ丸・三ノ丸からなる平城（ひらじろ）です。昭和61年に国史跡指定を受けて以来整備に取り組み、二ノ丸東大手門や本丸一文字門石垣などを復原し、新たなシンボルとなっています。

平成23年度より本丸西堀跡の調査と整備、同24年度より本丸御殿跡の発掘調査を行い、最上氏時代の本丸の遺構を発見しています。令和元年度からは、旧市営球場跡地にかかわる「本丸北堀土塁跡・北不明門跡」発掘調査を文化庁の補助を受けて行っています。

城跡の周囲は市街地となっており、その中心に位置します。市街北部を流れる馬見ヶ崎川による扇状地上に立地し、本丸一文字門付近で海抜約130ｍを測り湧水地帯に築かれた平城であったと考えられます。

今回公開する「北堀土塁跡（北東部）」では堀跡の屈曲部分を検出しました。また、土塁範囲からは江戸初期の最上氏時代の山形城に係る遺構・遺物を発見しました。



第１図　山形城跡調査区位置図

歴代藩主年表

和暦	西暦	藩主	石高
延文元年	一三五六	斯波兼頼	
慶長五年	一六〇〇	最上義光	五十七万石
		最上家親	
		最上家信（義俊）	
元和八年	一六二二	鳥居忠政	二十二万石
		鳥居忠恒	
寛永十三年	一六三六	保科正之	二十万石
寛永二十年	一六四三	幕府領	
正保元年	一六四四	（結城）松平直基	十五万石
慶安元年	一六四八	（奥平）松平忠弘	十五万石
寛文八年	一六六八	奥平昌能	九万石
		奥平昌章	
貞享二年	一六八五	堀田正仲	一〇万石
貞享三年	一六八六	（結城）松平直矩	一〇万石
元禄五年	一六九二	（奥平）松平忠弘	一〇万石
		（奥平）松平忠雅	
元禄十三年	一七〇〇	堀田正虎	
		堀田正春	一〇万石
		堀田正亮	
延享三年	一七四六	（大給）松平乗佑	六万石
明和元年	一七六四	幕府領	
明和四年	一七六七	秋元涼朝	六万石
		秋元永朝	
		秋元久朝	
		秋元志朝	
弘化二年	一八四五	水野忠精	
明治二年	一八六九	水野忠弘	五万石

２　本丸北堀土塁跡【北東部】発掘調査の成果

【本丸北堀跡北東部】～堀跡の屈曲部の検出と土塁裾部の瓦捨て場・護岸石垣の確認～

本丸北堀跡は令和元年の土橋跡検出に始まり、継続調査を実施してきました。令和４年度は北東隅部を調査し二ノ丸側土羽(どは)トレンチ調査により裾部を確認しました。護岸遺構はなく、自然砂礫層を裾としていました。一方、本丸土塁側では土塁裾部に瓦の大量廃棄痕が検出され、捨て場であったことがわかりました。瓦は江戸中期頃を主体としています。また、一部瓦を取り除くとそのなかから「護岸石垣」を発見しました。拳大の河川玉石を高さ70センチほど積み上げた堅固な遺構です。

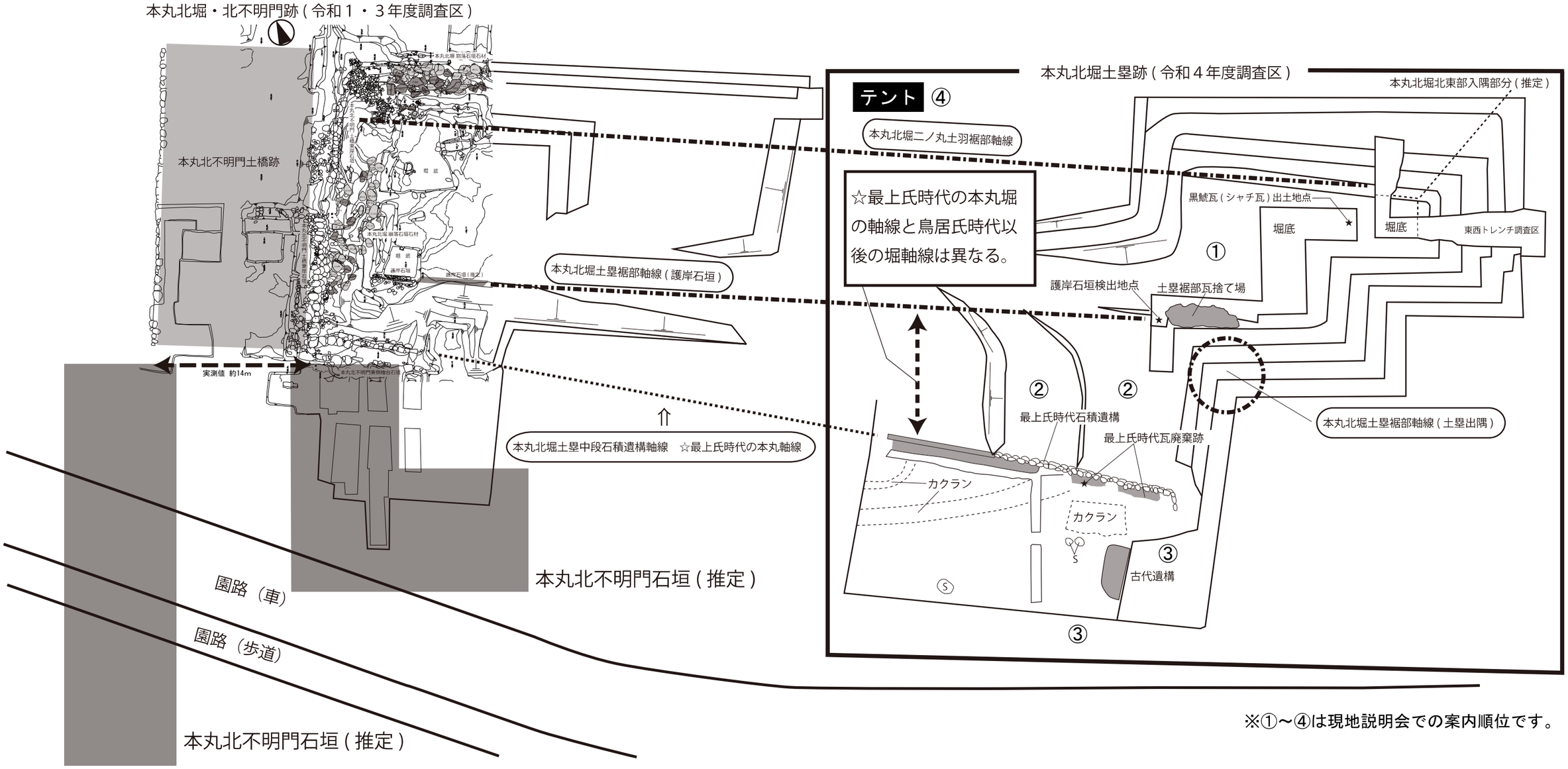
堀跡中央より、「鯱(シャチ)瓦」が１体発見されました。顔から体にかけての一部ですが最大長約50センチあります。体部は灰色～銀色で顔の意匠や体のウロコ状押し型文様が明瞭にわかります。これまで発見された鯱瓦に類似品はなく、新たな型です。出土位置から本丸北東隅櫓（艮[うしとら]櫓）の可能性が高いですが、やや外側に寄った位置で二ノ丸より混入した可能性も考えられます。

３　本丸北土塁跡【最上氏時代の遺構】発掘調査の成果

【本丸北土塁跡】～土塁中段石積遺構及び土羽と石積み上面に広がる金箔瓦を含む瓦廃棄痕～

本丸北堀跡は令和元年の北門土橋調査の折りに、最上氏時代の石積遺構を発見しました。やや大きめの自然玉石を２～３段積み上げたもので、土留めの役割だったと考えられます。これまでも本丸土塁中段で概ね検出しており、最上氏時代の本丸の重要な痕跡ととらえていました。

令和４年度の調査では、東部にその延伸部分を検出しました。東端部は石積みの屈曲（出隅）が認められ、最上氏時代の本丸の隅部であると考えられます。また、石積遺構は斜面を切り下げ平らな構築面を築いて設置されていましたが、その上面及び石積み前面などから多量の瓦が出土しました。黒瓦が主体で、一部に焼けて橙色に変色した瓦が混じります。「山」文軒丸瓦や「金箔」軒平瓦及び「鯱瓦」破片が発見されました。これらは本丸御殿跡で集中的に見つかった瓦と同時期のもので、一体的な城郭関連遺物と考えられます。おそらく、最上氏時代遺構群の廃絶期に一括で廃棄されたものと考えられます。



※①～④は現地説明会での案内順位です。